

捺印細胞診で証明し得た褐色細胞腫内転移肺腺癌の1例

©渡邊 拓也¹⁾、西川 武¹⁾、竹内 真央¹⁾、鈴木 久恵¹⁾、龍見 重信¹⁾、安達 博成¹⁾、藤井 智美¹⁾、大林 千穂¹⁾
奈良県立医科大学附属病院¹⁾

(はじめに) 腫瘍内に転移した腫瘍 (tumor to tumor metastasis 以下 TTM) は非常にまれなケースである。今回捺印細胞診において、副腎褐色細胞腫内に転移した肺腺癌症例を経験したので報告する。

(症例) 患者は65歳男性、2020年前医にて、肺腺癌と診断され肺癌治療中に副腎腫瘍も見つかり、褐色細胞腫と診断された。手術目的にて、奈良医大泌尿器科に転院、2021年6月、副腎腫瘍摘出術施行。摘出された副腎より小組織片を採取の上、同部位より捺印標本を作成した。

(細胞像) 明らかにタイプの異なる2つの細胞像が見られた。1つは少数の大型、多形を含む小型細胞が、一部ルーズな合胞状集塊、多くは散在性に出現していた。個々の細胞は、細胞境界不明瞭で好酸性、顆粒状で、核は類円形、N/Cは中程度、核縁は整、核クロマチンは顆粒状で均等分布し、一部には小型核小体を認め、形態から、褐色細胞腫由来の細胞と考えた。他方、上皮結合を有する比較的大型な細胞が腺管形成を呈し、集塊状に少数出現していた。個々の細胞は泡沫状の細胞質を有し、核は偏在傾向が見ら

れ、N/C増大、核不整、核大小不同、核クロマチンは微細～網状に充満、好酸性大型核小体を認めた。以上の所見は褐色細胞腫の細胞像から大きく乖離、臨床歴より、肺腺癌由来の転移性腫瘍を第一に推定した。

(組織像) 腫瘍1：一部多形を伴う、類円形核と好酸性細胞質を有する腫瘍細胞が、充実状、胞巣状に増殖、クロモグラニンA染色陽性を示し、褐色細胞腫と診断された。腫瘍2：明瞭な核小体を有する、腫大した類円形核と淡好酸性泡沫状細胞質を有する円柱状、立方状細胞が、管状構造を示しながら増殖、TTF-1陽性、P-40陰性、クロモグラニン陰性、以上より肺腺癌の転移として矛盾のない組織像と診断された。

(考察) TTMは非常にまれなケースであり、特に良性腫瘍内に、悪性腫瘍が転移する例は極めてまれである。文献的には副腎褐色細胞腫、髄膜腫内に肺腺癌、乳癌転移の報告があった。細胞像が異なる場合、TTMも念頭に置き、臨床歴を考慮の上、判定する必要がある。

奈良県立医科大学附属病院-0744-22-3051